月刊誌「みにむ」1994 年 2 月号　開倫塾の時間

# 年活は簡素に・思想は高潔に

－新年にあたり、「超低成長社会での生活の方法」を考える－

開倫塾
塾長　林　明夫

## １．はじめに

われわれが生活をする日本の社会は、大きな歴史の流れの中でどのようなところに位置するのかを考えることも、年の始めには意義深いことのように考えます。

## ２．人間の生活には四つの段階があると考えられます。

**第一段階**は、生きるか、死ぬか、たえず生命の危険におびやかされる生活。政治的な混乱のために国を出ざるを得ない「難民」の人々の生活。戦争や内乱のためにいつ爆弾や銃弾のために生命を失うかも知れない人々の生活。飢饉（ききん）や食料不足による飢餓のためにいつか死するかも知れない人々の生活。これらが、人間の生活の第一段階である生きるか死ぬかの生活といえます。この段階の生活は、人間として生存を維持するために生きることが最大の目標となります。
＊日本の社会では、歴史の上で数多く行なわれた戦いや内乱、最近では第 2 次世界大戦末期が思いおこされます。世界中には、現在でもこのような国が 30 以上あると考えられます。

**第二段階**は、食うや食わずの生活を国民の大部分がしている社会です。生存を直接おびやかす戦争や内乱・飢餓はないが、とにかく食べるものがない、身につけるものがない、住む場所がない生活がこの段階です。一人当り国民総生産（GNP）が、年間 200 ドル以下の国の人々の生活がこれにあたります。洪水が出るたびごとに国土の何分の一かが水びたしになったり、伝染病がたえず広がっている、乳児がどんどん死んでいく生活。日本では、最近では、第 2 次世界大戦終了直後、ほんの 1 ～ 3 年この状況がみられました。世界中には、現在でもこの状況の国が 50 以上あると考えられます。

**第三段階**は、仕事もいろいろな活動もある程度うまくいき、ある程度食うに困らず、子どもを高校や大学にまで行かすことのできる生活。功成り遂げた生活。仕事の量も豊富にあり猛烈に働けば働いただけの対価たる収入が確保できる。その収入で、家を建て、衣服や食料を購入、病院や学校にも家族を行かすことができる生活。日本は、第 2 次世界大戦後、昭和 30 年代から 40 年代・50 年代と約 30 余年つづけて、この「功成り遂げた」社会を築き上げてきました。「生きるか死ぬかの生活」からスタートして「食うや食わずの生活」から抜け出、「功成り遂げた生活」にまでもっていくのですから、ものすごいエネルギーを国民の一人ひとりが使用したこと言うまでもありません。アメリカをはじめとした世界の国々の援助、国民一人ひとりが休むことなく一所懸命まじめに勉強し、働きつづけたことが、日本の国民に「功成り遂げた生活」をもたらしたものと考えられます。①日本国民平均的寿命は世界第 1 位②日本国内での犯罪発生率は世界一低い③日本国民の非識字率は世界一高い④国民一人あたりの国民総生産は世界で 1、2 を競うほど高い⑤この 49 年間 1 名も徴兵されていない（世界中で日本だけ）⑥外国との貿易の結果、黒字額は世界一高い。

日本は、誰にも否定できないほど「功成り遂げた国」になりました。

**第四段階**では、今、日本はどこにむかっているのかといえば、次の第四段階、つまり、内面的充実を求める生活に入っていると言えます。「一人馬に乗って丘の上に行き、はるか遠くを見ながらフーとタバコを一服すう」アメリカのタバコ会社の宣伝がありますが、あれに似ています。ベイトソンという人が「自然と精神」という本を出し注目をあびたことがあります。「自分自身の中に本当にやりたいことを見い出し、自然と一体化しながら、精神の充実を求める生活」が第四段階といえます。

私は、日本人がここまで一所懸命にあらゆる知恵を出しながら働きつづけてきたのですから、最後には、第四段階にまでつきすすんでもよいと考えます。住むところ・食べるもの・身につけるもの・学校・病院・乗りものと、まだまだ不十分かも知れませんが、他の国々と比較してある程度まで整った日本ですから、そろそろ内面的充実に向けても一人ひとりの努力を傾けはじめてもよいと考えます。

日本の経済は本年も来年も好転するとは考えられません。従ってこれからは家族の年間の総収入も今までのように一定の割合で増え続けるとは考えられません。事によると家族のうち一人や二人は働く場を失ったり、収入を減らすことも考えられます。ただ、そうだと言っても、食うや食わずの段階や、生きるか死ぬかの段階にまで日本が一気にころげ落ちることもないと推測されます。おだやかな形で社会が成熟期を迎えると一番考えられます。この経済の状況はもしかしたら、「内面的充実」を求める生活には合っているかも知れません。

＊ただ内面的な充実を求めるあまり、日本人がもっている勤勉さを失ってはならないと考えます。不況の時こそ、今までにも増して熱心に働かなければ日本の会社などあっという間に跡形もなく消え去ってしまいます。「研究開発」や「技術革新」を最大の熱心さで行うことこそ不況の時は必要です。仕事をもつ人は不況の今こそ全身全霊を傾けて仕事に打ち込むべきです。学生は学生の職業である勉強に全精力を傾けて打ち込むべきです。日本が他の国に優るものは、国民の高学力と勤勉性・研究熱心さしかないのですから。労働時間が削減されたからといって遊ぶ時間を増やすようではその人にも又日本に将来はありません。自分自身の仕事の上での能力を更に高めることが削減された労働時間の使い方として最も重要です。

## ３．簡素な生活・高潔な思想(Plain Living and High Thinking)のすすめ

東京都八王子市にある「大学セミナーハウス」のモットーがこのことばです。大学を出た後も何回か大学セミナーハウスでのセミナーに参加させていただきましたが、そのたびごとにこのモットーに触れ感銘を深くしていました。

今までのような急激な経済的な発展が期待できない以上、目指すは「簡素な生活」。それでいて自然と精神の一体化と内面的充実をはかり「高潔な思想」を自分なりにつくり上げること。これが必要なのではないかと考えます。そのために何をどうすべきかを年の始めに是非皆さんにも自分自身で考えて頂きたいと希望します。具体的にどうしたらよいか以下列記しますので参考にして下さい。

①まず大前提として今しなければならないことを確実に行うこと。自分の仕事は最大の熱心さで行うこと。学生の仕事は勉強であるから、まずは勉強に熱心に打ち込むこと。

②お金はコツコツためること。1 円のお金も粗末にしないでためること。無駄なことにお金は使わないこと。

③家の手伝いは熱心に行うこと。自分の家庭や生活は自分で作りあげるものだと考え、家の仕事は熱

心に行うこと。

④やりたいことはどんどんためらわず行うこと。行きたいとことがあればどんどん行くこと、会いたい人がいれば積極的に会いに行くこと(芸能人は除く)。

＊ただそのために周到に計画をたて準備をすること、意味のない行動は少なくすること。会ってくれた人にはサンキューレターを必ず出すこと。

⑤一生かけてやりたい趣味・スポーツ・社会貢献活動・外国語・研究課題をゆっくり捜すこと。一番自分に合った非営利組織をゆっくり捜し積極的に参加すること。(他人の弱点にはすべて目をつむること。他人の批難は口にしないことがこの⑤をするときには必要です)。

⑥一つ一つていねいにものごとをやり、一日の終りには、その記録をとっておくこと。資料は、確実にファイルしておくこと。